

TATSUTO SHIINA

Complete jam & some other stuff

(2008-2009)

SoulGardenRecords

Complete jam & some other stuff (2008-2009) / Tatsuto Shiina

2009.6.24 Release 2,625円(税抜価格 2,500円)

SoulGardenRecords / BounDEE,Inc.

収録曲(順不同)

Evidence / Mt. H / Chiro / Soulful Drum / Boss / alfee / Red Clay / room / Jam #1 full ver. / Boss alt take / BossChiro remix / adventures 1 / adventures 2 / remix2

Musicians:

Tatsuto Shiina(Bs,Composition), Takahito Mori(Gt), Masanori Amakura(Ds,Per), Shota Hishiyama(Pf,Key,Org)



Tatsuto Shiina[椎名達人(シーナタツト)] - Profile -

ベーシスト、トラックメーカー、80年代半ばから90年代初めにかけて東京のアンダーグラウンドジャズシーンで、菊地薫グループ、Art Core Funk等に参加。その後、自らリーダーを務めるShiinaBand名義で2002年~2005年にアルバム「Tele- Universe」(SoulGardenRecords)をリリース。2002.02.14及び、ミニアルバム「ShiinaBand」(Jazz Electrica WAVE-004、2002.06)を制作。また2枚のコンピレーションJazz Electrica Vol.1 Inner Child (N/A FARM Records)、Progressive HipHop/VA ソニーミュージックソニエイトレックス ACP259 に参加。2008年12月に本アルバムより2曲を先行配信している。

Tatsuto Shiina, "Complete jam & some other stuff (2008-2009)" リリース記念インタビュー

1980年代後半よりJazz ベーシストとして活動を始め、以降Hip HopとJazzの融合を模索し続けてきたアンダーグラウンド的存在Tatsuto Shiina(椎名達人)。その彼が2009年6月に2枚目となるリーダー作をリリースする。

ジャムはジャズの原点、昔はみんなジャムだった

— まずは発売おめでとうございます。

Shiina:ありがとうございます。

— フル・アルバムとしては、前回2001年に"Shiina Band"名義で出された"Tele- Universe"Works that we can temporarily do with HipHop and Jazz"以来、2枚目のアルバムということになります。前はバンド形態でしたが、今回は"Complete jam & some other stuff"として個人名義のアルバムとなります。どのような違いがあるのでしょうか？

Shiina: "Tele- Universe"は、生バンドでありながらドラムの代わりにサンプリングを使ったHip Hop Jazzだったんですが、今回は一発録り中心のジャム色の強い内容になっています。1990年代後半からクラブシーン、特にHip Hop系のシーンでバンドとしてやっていたことの総決算が2001年の"Tele- Universe"というアルバムだったわけですが、今回はもっとざっくりとしたジャム感を前面に出したいと思い、ジャムの得意なミュージシャンにサポートをお願いして録音しました。結果的には前回の録音のメンバーとかぶったのですが、どう転ぶかわからないというか、その場の雰囲気を楽しんでみようというのが今作の試みです。

— そのあたりが、今回のアルバムタイトル"Complete jam & some other stuff (2008-2009)"に結びついているのでしょうか？

Shiina: 例えば、昔のBlue Note、Riverside、Prestigeとかいったジャズ・レーベルには、いいメンバーを集めて、その場でざっとアレンジを決めてとどろろ録音するというセッションのカルチャーがありましたね。当時のジャズって、かなりジャム度が高かったと思うんです。またジャムだからこそ、あれだけたくさんの音源が残せたともいえるでしょう。レーベルの商業的な観点の必要性もあったとは思いますが、固定化したバンド・サウンドというよりは、ともかくジャムをどろんどろん録音していくみたいなスタイル。もともと、こういう制作システムは現在ではなかなか取れないですけど……。前回のアルバムでは、録音したソロ・パートまでも"ぶった切り" & 再構成みたいなやりかたで楽曲を作り上げていくという手法を取ったものも多いのですが、今回は、1)完全に生演奏でやっているトラック、2)生演奏の素材を生かすつ曲間にノイズを入れたりなどして作ったトラック、3)前作同様に"ぶった切った"ものを再構成したトラックと、大まかに言うと3種類のトラックから構成されています。録音した音源を使い、それらをちょこちょこいじって作ったトラックも一緒に混ぜて一つのCDにすると、これはある意味Hip Hop的なアプローチなかもしれません。ただ、純粋にHip Hopというよりは生演奏の素材を生かして作る要素が強かったと思います。そのへんが前回の"Tele- Universe"とは大きな違いです。

— バンド形態の頃の方がトラック・メイキング色の方が強くて、個人名義になった今回の方がよりバンド色が強くなった。逆説的な現象が起きていますね。

Shiina:言われてみればそうですね。レコーディングはたったの1日、コード進行も紙切れ一つのみでパッと演奏する、そしてそれをミックスする。

— 一日でレコーディングを仕上げたとのことですが、それにしても素晴らしいクオリティです。

Shiina:いやいや参加していただいた素晴らしいメンバーの技量につきます(笑)。

— その今回のアルバム参加のメンバーについて改めてお聞きしますが……。

Shiina:沖野修也氏のThe Roomという渋谷のクラブで毎水曜日の深夜に行われていた"Sofa"というジャム・セッションで知り合ったプレイヤーがお二人。ドラマーの天倉正敬君とキーボード奏者の釜山正太君です。この"Sofa"というセッションは当時の東京のジャムシーンを代表するイベントだったと思います。それから10年以上も一緒にプレーしているギタリストの森孝人君。彼には"Shiina Band"のメンバーとして最初のアルバムにも参加してもらいました。彼のギターなしには私の音楽はあり得なかったといっているくらいに相棒でした。ま、勝手にこちらが思っているだけかもしれませんが(笑)。森君は現在、ロサンゼルスに拠点を移して活動しています。あとは、宇宙灯ルのタケオ君とマナちゃんにボーカルで参加してもらってます。

— 今話にでた"Sofa"というジャム・セッションからは、いくつもいいバンドやミュージシャンが現れましたよね。

Shiina:Origami Productionから作品をリリースしてるShingo Suzuki氏、45(Swing-O)氏、Urb、Groove line、SOIL&"PIMP"SESSIONSといったジャムバンド系のミュージシャンがよく参加していたと思います。



Hip Hop 通過前 / 通過後……

— ところで、Shiinaさんご自身の音楽経歴について少し……。

Shiina:その昔、新宿のビットインが伊勢丹の裏にあった頃、朝の部・昼の部・夜の部とあって、大学のジャズ研サークル時代から、朝の部とかに出させてもらっていました。そのころ菊地成孔さんとかと共演させていただきました。90年代の前半は活発には音楽活動をしてなかったのですが、90年代半ばから"Shiina Band"で活動を再開しました。

— 音楽的にはJazzがベーシックにあるのだと思うのですが、そのShiinaさんがHip Hopに向かった理由は何なのでしょう？

Shiina:とにかく面白かったということです。DJ / ターンテーブルリスト(現在メディア・アーティスト)の真鍋大度氏と知り合いになったのがきっかけで、Hip Hop Jazzのバンドが実現したんです。実はShiina Band名義のアルバム制作中はドイツでした。2004年に日本に帰国したら、若い才能のあるミュージシャンがジャムっぽいことをガンガンやっているシーンがあって、非常に刺激を受けました。20代、30代の若手ミュージシャンがジャムを通じてクリエイティブな音楽を作ろうとしていて、まさにミントハウス(40年代NYのビバップ発展期におけるジャムセッションのメッカ)的な匂いがありましたね。そろそろ00年代も終わるわけですが、自分にとってはジャムっていうのがこのディケードを象徴するキーワードなんです。だから今回のアルバムは、00年代の総決算みたいな位置づけで、サンプル&エディット中心ではなく、生演奏でジャムった雰囲気を最大限に生かそうということで作り上げてみました。もちろん、Hip Hopのようなクラブ系の音楽を通過したからこそ生まれる感覚というものは随所に反映されているのではないかと思います。

— ところで今回アルバムに収められている楽曲について少々お聞きしたいと思います。カバー曲がいくつかありますね。まず、“Evidence”。

Shiina:大好きなThelonious Monkのジャズ・スタンダード曲ですが、Monkの曲はリズム・アプローチが面白いものが多い。

— 原曲とは変わっていますが？

Shiina:実は、Fort Apache Bandというアフロ・キューバンジャズのバンドがあって、この曲を採り上げているのですが、それがめちゃくちゃジャムなんですよ！正直いって、かなり影響を受けてます。

— そして次に“Red Clay”。昨年亡くなったFreddie Hubbardの曲になりますね。

Shiina:Freddie Hubbardに捧げてこの曲を採り上げたというわけではないのですが、子供の頃から大好きなJazzプレイヤーです。パワフル、マニッシュ、ハイテクでしかもエンターテイメント的要素もあるプレイヤーですね。この曲ではドラム・パターンがThe KnackのMy Sharonaみたいでしょ。天倉君の素晴らしい発想によるものです。

— この曲の後半からは、前半と若干関連づけられたコード進行でギターソロが展開されています。

Shiina:“Red Clay”からJam#2へとメドレーで演奏してます。“Red Clay”の動的で激しい部分から一転してガラッと風景が変わる感じを楽しんでほしいと思ってます。

— 他のカバー曲は？

Shiina:Burt Bacharachの“Alfie”。これは12時間近くに及んだレコーディングセッションの最後のダラーつとした雰囲気の中でやりました。疲れた気怠さ、ダラーつとした感じが出ていけば成功です。それと、Jack McDuffのブルース“Soulful Drums”。この曲は、3コードのブルースで、ベースラインも定型だし、メロディも単純なもの。シンプルなブルースなんですけど、それをいかに自由で型にはまらないで表現で演奏できるか？という意味では非常に奥の深いチャレンジですよ。ブルースを発展させてきたのがジャズの歴史といっても過言ではないですから。

— ブルースと言えば今回のアルバムのオリジナル曲である“Mt.H.”もJack McDuffあたりの雰囲気を残していますね。

Shiina:まさにブルースです。たった2つの単音を使ったテーマをギタリストの森君に提示して、ジャムっただけ。70年代のPrestigeレーベルのソウルジャズのようなざくつとした雰囲気を聴いてもらいたかったのです。そういえば、その当時のレコードを聴いていると、演奏上のミスみたいなもの結構あったりするわけですが、そういうのも平気でリリースしちゃうんですよ。



— 間違えた・間違えないとかいうよりも、雰囲気を聴かせるということなのでしょうね。あと、“Adventure”、“BossChiro Remix”などの楽曲には、クラブミュージック的要素が盛り込まれていますね。

Shiina:生演奏のセルフサンプリング&エディットですね。楽曲の一部分のみに再構成のやり方を採用したトラックや、全面的に再構成したトラックとか、3曲ほどアルバムに入れました。“BossChiro Remix”では生のアンサンブルをそのまま活かした部分はなく、リズムについても完全にばらして再構成した作り方をしています。

— オリジナル楽曲はどれも素晴らしい出来映えですが、なんとと言ってもアルバムを文字通り代表する“Jam#1”では、Shiinaさんはじめ皆さんのソロが冴え渡っていますね。

Shiina:この楽曲に関してはジャムの真髄であるインター・プレーを純粋に楽しんでもらえれば嬉しいです。

— 最後に、今作は一貫して“Jam”の精神を貫かれています、その見地から最もジャムなCDをご紹介します。

Shiina:ではでは、個人的な見方で恐縮ですが、4枚ほど紹介させていただきます。私的にはこれらの音は心の底から好きです。



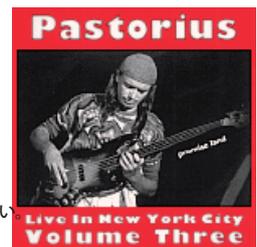
1) Charlie Mingus, "Mingus at Carnegie Hall"



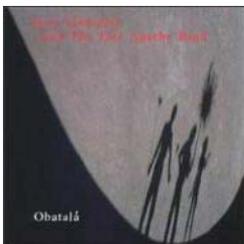
LPの裏表でブルースと逆循環の2曲だけ。でもジャズのジャムセッションの神髄がこのアルバムで味わえると思う。特にローランド・カークがやばい。

2) Jaco Pastorius, "Live in New York City, Vol. 3: Promise Land"

ジャコの晩年はあんまり評判よくないけど、この手のジャムは俺は好き。バカラックのアルフィーもやってます。

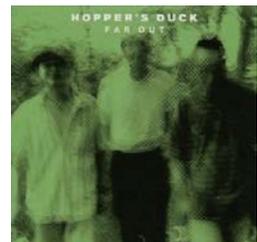


3) Jerry Gonzalez & the Fort Apache Band, "Obatala"



NYのアフロ・キューバン・ジャズのバンドなんですが、インタープレイとかリズムのアプローチがものすごく

4) HOPPER'S DUCK, "FAR OUT"



ニッポン代表、というか「中央線」代表。これもバンドですが、古澤良次郎、川端民生、林栄一という、本邦ジャズ界が誇る超個性派3人によるむき出しな感じの音。